

今月の御教え

もとをとって道を開く者は、あられぬ行もするけれども、後々の者は、そういう行をせんでも、みやすうおかげをうけさせる。

……金光教教祖御理解 第九十一節……

解説

この御理解は「開祖、創始者と言われる方々の並々ならぬご苦労があつてこそ、人々の救済の道が開かれたり、社会に有益な事業が起こされて、後々の人々が楽にその恩恵を受けることが出来ている」と言う事でありますが、このことで教祖様はいったい何を伝えようとされているのでしょうか。

それは、明治の代となり文明開化の名のもと国を挙げて欧米の科学技術導入による近代化に奔走する中に、学術知識編重の傾向が高まり、お道においても、その影響を受け「教師、世話役も学問、学識が第一」との思惑のもと、信行、修行が軽視され後回しになる風潮を憂えて、発せられたお言葉ではないでしょうか。

「学問はあつても真がなければ、人は助からぬ。学問があつても難儀をしているものがある。此方は無学でも、みなお蔭をうけておる」「信心は本心の玉を磨くものぞや」との御教えにありますように、後々、子孫がお蔭を受けてゆくためには各々が、日々、信心信行に励み精進してゆくことが不可欠ではないかと思われれます。